

関係性発達の新たな視点として甘えが意味すること（3）

—移行期における甘え機能の実証—

大道えりつ

（武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科）

【問題と目的】 発達の変化を考える時、その変化は連続的・漸進的であるか、それとも非連続的・飛躍的であるかということが問題とされる。三宅(1986)は、「発達」というのは本来変化の「過程」（連続性・移行）を意味するものであるはずが、これまでの多くの研究において変化の結果（非連続性・段階）として捉えられていると述べている。これまでの一連の研究で取り上げてきた甘えの捉え方においても三宅が述べるような移行という視点ではなく、変化の結果として捉えられ、「依存」対「自立」という、形成過程の結果として出現したもののとして、非連続的な枠組みの中で捉えられてきた。

前報告(大道, 2012)では、甘えを社会適応的な複合機能として捉え、発達の移行期に機能する中間的な段階、「可能領域」として捉え直す試みをした。「可能領域」は、上述した二つの状態とその機能が同時に存在し、どちらの型式での行動も可能である状態を自分で許し、環境もそれを許している状態として捉えられる。その領域は、次のステップに進むための「猶予期間」として機能し、新しい行動や他者との新しい接し方が定着するまで、両方の方法を試すことが許される期間として、どの行動発達の移行期においても同一のメカニズムとして機能するものと仮定される。今回の報告では、これまでの研究を受けて、臨床場面を例にとりながら、「可能領域」がどのように記述され、移行のメカニズムとしてどのような機能・役割を果たしているのかを治療セッションの事例分析を通して検討する。

【方法】 **事例の特徴：** 児童期、青年期、老年期の各年齢段階に属するクライアントの、論文として公開されている治療セッションの事例を取り上げ、治療者とクライアントのやりとりなどの回復過程を分析した。事例の選択基準として、「甘え」、「依存」、「リミット・セッティング」をキーワードとする事例を取り上げた。**分析方法：** 各事例の中で記述されているクライアントの回復過程を「介入前」「介入中」「介入後」と分け、各段階でクライアントとどのように接し（問題行動ごとのような放物を取り）、クライアントがどのように反応したのかを切り出した。回復過程の分類において、「介入中」を「可能領域」に該当する部分と仮定し、そこでの行動を介入前と介入後の行動と比較しながら、両段階での行動がどのように共存しているのかを詳細に分析した。（事例の概要表1を参照）

表1：事例の概要 (Cochren, Cochren, Cholette, and Nordling, 2011)

	介入前	介入中	介入後
やりとり	<ul style="list-style-type: none"> 教師と同級生: クラス内の彼の存在を恐れていた。 母親: お手上げ状態 	<ul style="list-style-type: none"> セラピスト: Empathic scaffold = 行動の制限を行ながらも、子どもの自己表現を尊重するのでなく、共感的理解、受容、寄り添うよう接する 	<ul style="list-style-type: none"> 教師と同級生: 彼の存在を楽しみ、歓迎するようになった。
クライアントに対する対処法	<ul style="list-style-type: none"> 処罰: 先生の問題行動への介入、園長による懲戒8回、停学処分2回 	<ul style="list-style-type: none"> 遊戯療法: 行動制限を行ながらも、子どものポジティブ、ネガティブな自己表現を肯定的に受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 遊戯療法: 行動制限を行ながらも、子どものポジティブ、ネガティブな自己表現を肯定的に受け入れる。
クライアントの反応	<ul style="list-style-type: none"> 痛癢を起す 校則を破る 反抗的、口答えする 悪いことをしたのに悪いと思わない 	<ul style="list-style-type: none"> 試し行動を行い、制限に直面すると、更なる制限の限界を直したあと、速くまた集まる。 故意的にセッション終了の5分前にルールを破ってセッションを終わらせる。(11セッション) 攻撃的・過激な遊戯の速す: 攻撃的ルールプレイ-恐竜のぬいぐるみとフォレスごっこ、ゲームを介して自分勝つよう仕切る、過激な遊戯-動物保護をテーマとしたロールプレイ、赤ちゃん言葉を使う、セラピストを「ママ」と呼ぶ。(12セッション) 	<ul style="list-style-type: none"> 力はするものの、セラピストにもゲームに勝つチャンスを与える セラピストに、自分の名字と名前を書けるようになったと書いて見せる自己表現できるという自満の表現 プライドを持って、自分の考えやアイディアに沿って、集まって絵を完成させることが出来るようになった。 自分で自分に制限をかけられるようになった: 「私がしている悪いことの一つは..」

【ケースにみる移行過程の検討】 事例1の介入前のやりとりにおいて見られる行動は、社会的に望ましくない行動に対する罰であった。教師の問題行動への介入と懲戒、停学が選択手段であった。子どもの行動をみると、反抗がレパートリーの中心であった。介入時では、表こみられるように、試し行動がみられるようになり、罰に相当する行動と望ましい行動が混在するようになっている。この両者混在の中からは、漸進的ともみられる行動が現れている。この過程を経て、介入後の記述では、比較的安定した行動の形成が示されるようになっている。事例の介入の過程を分析することによって、本研究で言うところの、可能領域(介入中)においては、初期の問題行動と、介入後の比較的落ち着いた行動が共存しているが、これに対する支援者の「共感的理解と寄り添い」という対応は、クライアントの問題行動を試行錯誤しながら修正するという移行期間の活用による行動と考えられ、自発的に望ましい・適応的な行動を取るための足場を提供していると考えられる。この移行段階が、介入前の問題行動と介入後の望ましい行動をつなぐ働きをしており、非連続的な変化ではない、穏やかな変化を可能とする、甘えることができる期間であると考えられるのである。甘えを、移行期における、変化前の行動と変化後の行動の共存状態を許す可能領域において観察される行動であると考えれば、変化の機構が説明できるかもしれない。